

## 安全管理マネージャー報告

### 1. はじめに

後に報告するように、大きな事故もなく大会を終えることができました。ビーナスラインを車で走っていても、初秋のノルウェーを訪れたような気分に入ることができました。自らの脚でこの自然の中を走った皆さんは、さぞかし、黄金色に輝く霧ヶ峰高原を堪能したことと思います。

事故がなかったことは喜ぶべきことですが、幸運に恵まれただけという評価もできます。キャンプ場は、最低気温がマイナス3～5度になっていたはずですが、天気もよく、全くといっていいほど風もありませんでした。そんな条件の中ですら、毛布で保温しても震えが止まらない低体温症の事例が発生しました。長距離でエネルギーを使い果たしていると、熱を生み出す力が弱まり、容易に低体温症に陥ります。もし少しでも条件が悪ければ、より多くの低体温症が出てもおかしくありませんでした。

もちろん私たちは、一定数の低体温症の発症を見越し、暖かい場所とスタッフを確保していました。それでも十分ではなかった可能性はあります。より過酷な条件に対する皆さんの準備は如何だったのでしょうか？自分の行為を否定的に捉えることは面白くないものですが、将来の安全のためには、時には自分の行為に対する厳しい見方も必要です。

### 2. ルールからの逸脱について

プログラムにあるように、「このレースは全参加者がフェアプレー精神をもち、かつ安全を確保しながら、競技中の行動、装備に責任を持つというルールを守ることによって成り立っています。」主催者は、参加者が自分の力でその安全を守れるレベルにリスクを抑えることを原則とし、参加者にはその範囲で自らの安全を守ることが求められます。ルールや装備、ルールに対する厳格さはそのためにあります。

残念ながら、今年には以下のようなルールからの逸脱がありました。

#### 1) 落とし物

必須装備の携帯電話の落とし物が複数ありました。チームが特定できた場合には、残念ながら失格と致しました。UKのOMMでは携帯は必携装備ではなく、また初日にフィニッシュに帰還しない場合にも、当然連絡を取ることはありません。法理的にこのような対応を取りにくい日本のOMMでは、携帯電話はもしチームに何かあった時に自らの身を守る命綱とも言える機器です。

その他にも、コッヘル、レインウェアの落とし物がありました。高価だからではなく、命綱であるという視点から、落とし物に対して高い意識を持っていただきたと思います。装備が極端にコンパクトなあるチームのメンバーが、「落としそうな小物は全て予備を持っています」と語っていたのは印象的でした。ただ軽さを目指すのではなく、どうやって二日間自分とパートナーの身を守るか？装備についてのそういう視点をぜひお忘れなく。

## 2) ペアの分離

ペアが大きく分離したために、失格としたチームも複数いました。トレランと違って、参加者が大自然のどこを通過しているかも分からないこの競技において、安全確保の最後の砦がパートナーです。取り残されたメンバーにもしもの事があれば、後悔を背負うのは取り残した方です。場合によっては先に行ってしまったメンバーの方にもしものことがあるかもしれません。その時ダメージを最小限に食い止めるのがパートナーであるということ、だからこそペアの分離には重いペナルティーが科されているという点をご理解ください。

## 3. アンケートについて

約1週間の間に150を超えるアンケート回答をいただきました。締め切りまで少し時間がありますので、まだ集計は完全にできていません。安全管理レポート第二弾として、アンケート結果についてはご報告する予定です。特に自由記述の代表的な意見とそれについての主催者の見解についてはお知らせする予定です。

安全管理のレベルや必須装備の内容については、概ね適度であるという回答が最頻でした。参加者が自ら安全を守ることになっている点を評価する意見がある一方で、それは主催者の一種の逃げではないかというご意見もありました。リスクへの対応の仕方について、一つの正解はないと考えています。ただ、意見の根底にどのような考え方があるかを相互理解することは、リスクマネジメント上も重要だと考えています。

## 4. おしまいに

OMMも今年で6回を迎えました。これまで大きな事故もなかったことは、私たちの誇りですが、同時に参加者の皆様の理解と協力があればこそだと思います。この実績に慢心することなく、今後も適切なリスクマネジメントを続けていきたいと考えています。